



卓 話



「知的障害をもつ選手から学ぶもの」

2006 INAS-FID バスケットボール世界選手権大会
ヘッドコーチ 小川 直樹氏

＜はじめに＞

本日お話をさせていただく知的障害の方々、私どもが指導をしている非常に軽度な方々であります。知的障害者全般の話ではなく、アスリートとして接しているごく一部の方々の話です。



さて、日本国内でIDバスケットボール競技の歴史は然程古くはありません。1996年に初の全国大会が開催され、昨年の大会で第10回大会を終えたところでもあります。

障害者スポーツの代表的な競技で言えば、車椅子バスケットボール等が挙げられますが、東京パラリンピックの時代からですから40年以上は経っている訳です。

障害によるリハビリから始まったものが、いまや選手達はアスリートと呼ばれる競技スポーツに変化をしてくれています。

私は競技者、指導者として約30年間、バスケットボール競技に携わっておりますが、この世界を知る前は日本国内のバスケットボールの底辺はミニバスケットボール（小学生）だと認識しており、シーズンオフの時には、全国を歩き渡り、クリニックと称して活動をしてまいりました。

関係者より「IDバスケットボール」の存在を知らされ、知的障害とは何ぞやという疑問と共に、非常に競技としては激しいバスケットボールを障害者が出来るのかという不安を抱きながら大会を視察しました。

我々健常者が開催する大会と何ひとつ変わらないものであります。ただ、観客が関係者のみということだけで、ルール、レフリー、オフィシャル、試合運営等はすべて同じでありました。選手達が一生懸命にプレイしている姿、シュートが決まった時の最高の笑顔を見て、このIDバスケットボールに協力したい気持ちが大きくなりました。

＜シドニーパラリンピック＞

2000年に開催されたシドニーパラリンピックからIDクラス（知的障害の部）の団体種目として初めて男子バスケットボールが正式に採用されました。IDの選手達はコミュニケーション等の問題があり、団体種目は不向きとのことでした。個人種目として陸上、水泳、卓球、クロスカントリー競技は既に存在しておりました。

シドニーへ出場をするために、国の競技団体の発足が必要であり、1999年の3月に私どもの日本FIDバスケットボール連盟が立ち上がりました。また同年10月にはアジア予選を日本で開催し、日本、オーストラリア、ニュージーランドの3カ国で行いました。オーストラリアはホスト国であり、実際には出場枠は確保されておりましたので、ニュージーランドとの一騎打ちとなった訳ですが、点差を付け勝利し、シドニーの出場権を獲得しました。

シドニーパラリンピックでは、世界から8カ国が出場し、リーグ戦、順位決定戦を戦った訳ですが、残念ながら最下位という結果に甘んじました。大会ではスペインチームが優勝し、誰が見ても素晴らしいチームでありました。然し、大会終了後、その選手の中から、告発があり、選手12名のエントリーの内、10名の選手が健常者であるということがわかりました。IPC（国際パラリンピック委員会）はこの事態を重く捉え、IPCが主催をする大会からはID（知的障害の部）の競技すべてが排除という結果に陥りました。

知的障害とは何ぞやという問題に、出場資格が厳密に整理されておらず、2002年のソルトレイク冬季パラリンピック、2004年のアテネパラリンピックにも出場が出来ない状況になっております。

この事態にINAS-FID（国際知的障害者スポーツ連盟）がIPCと協力をしながら、現在ID選手の出場資格について整理を始めたところでもあります。

＜選手の社会的環境＞

1998年の第3回世界選手権大会に日本代表チームを派遣した際に、帰国した選手が職を失うという事件が起きました。約2週間も職場を留守にする中で、企業側から理解をしていただけないためでした。この反省を生かし、現在は選手の各所属先に出向き、状況

を説明し理解を求めております。現在は、社会的な景気の回復に、障害者雇用率も上向きになったようですが、当時はそのような状況でありました。「その選手が留守の間に代わりの人間を雇うほうが高くつく」とまで言われ、彼らの環境改善をしていかなければ絶対に競技に臨む事は有り得ないと痛感しました。

家族性の問題もあり、保護者も知的障害であるという部分も数多くあります。生活するだけで精一杯であり、生活保護を受けている選手も実際には存在します。いくら力はあったとしても、そのような環境ではバスケットボールに真剣に取り組める訳がありません。このような状況を脱するために、我々大人たちが立ち上がり、努力をしなければなりません。

また、代表チームの活動のためには、当然ながら資金が必要であり、企業にも支援協力を依頼してまいりました。然し大半がNOという答えであり、また「小川さんのところの選手は絵にならない。広告価値としては非常に低い」という意見が大半でありました。軽度な知的障害者であり、目に見えない部分の障害であります。これが日本の認識であると捉え、そうではないことを理解していただくために日々全国を渡り歩き、草の根活動しております。

行政に関しても意識は低く、「知的障害者がスポーツをする」こと自体、あまり知られておりません。特に地方行政からは、問い合わせが多く、ひとつひとつ説明をする状況にあります。

<選手の指導に関して>

私が指導の中で大切にしている部分は、「特別扱いをしない」ということです。前途したように器具を使う訳ではないので、健常者のバスケットボールと同じように指導をしています。バスケットボールは「習慣のスポーツ」と言われ、いい習慣を身につけなければいいプレイヤーには成長しません。また、スポーツ競技の中でルールを学び、仲間とのコミュニケーションを図り、努力を重ね、人間的に成長していきます。健常者も知的障害者も変わりはありません。ただ、理解力が低いために、指導内容の理解にはかなりの時間を要します。1から5まで理解しますが、その次は中々進めないのです。また1からやり直し、ようやく6まで進める程度です。強化合宿等でもフィードバックしている時間が非常に惜しいので

すが、仕方がありません。

現在、私どもが指導している日本代表チームのキーワードは「考える」にしています。「考える」ことが非常に苦手になっている選手に対し、酷であるとの話もありますが、あえて挑戦しています。バスケットボールは瞬時の判断が必要な競技です。自分の目の前に起こることをある程度予測し、自分の目で確認をし、その場での判断、そして行動する。

今までのID選手への指導は、このような状況ならば右、そうでなければ左という決まったパターンが多く、選手自身に選択させることはあまりありませんでした。

軽度な知的障害のある選手達は、養護学校ではあまり手が掛からないと言われます。自分のことはある程度なら出来るからです。養護学校では軽度な方たちだけではありません。中度、重度の障害者も多く在籍をしています。そのような環境で学校生活をしてきた彼らが、社会へ一歩脚を踏み出した瞬間に、逆転現象が起きるのです。そのような状況に馴染めず、徐々に社会からドロップアウトをしてしまう人たちが多くいます。バスケットボールという競技を通じて、考えることを覚え、社会への対応力を身に付け、大きな自信を持ってもらいたいと常に考えています。

彼らの純な気持ちを如何に上手く引き出すことができるかがポイントであり、指導をする難しさを日々痛感しています。

目の前にある壁をひとつひとつクリアしていくプロセスを大切にしながら指導を行っていきたいと思います。

<2006INAS-FIDバスケットボール世界選手権大会>

本年9月29日から10月6日まで横浜市に於いてIDクラスの世界選手権大会を開催致します。世界から男子8カ国、女子6カ国が集い、世界No1を決める大会であります。一昨年の春からこの大会に照準を合わせ、強化活動を実施しております。

是非、彼らの勇姿を会場で見ただけであれば嬉しく思います。大会を成功させることによって彼らの自信に大きく繋げられるように我々も努力をしたいと思えます。

是非、ご支援ください。